

多摩川流域の「水辺の楽校」等の広域連携活動調査報告

多摩川教育河川ネットワーク構想



平成20年2月

美しい多摩川フォーラム 教育文化部会

多摩川教育河川ネットワーク構想

はじめに

現代の子どもを評して“3間ナシ世代”と呼ばれている。遊び仲間・遊び時間・遊び空間の3間である。その結果、文部科学省が昨年10月に発表した「子どもの運動能力調査」によると、スポーツの基本である「走る」「跳ぶ」「投げる」のすべてにおいて、20年前の調査結果をかなり下回ったという。これは体力面だけの問題ではない。

*

子どもは異年齢の群れ遊びを通じて社会性を身に付け、自然遊びを通して生きものの命や「かわいい、きれい」といった感受性を育んできた。いわば人間らしさの基盤である。空き地は消え、道路は舗装され、公園はあってもボール遊び禁止、木のぼり禁止、草花摘み禁止の中にあって、子どもが子どもらしさを存分に発揮できる場所はないのだろうか。その受け皿が、現在の「水辺の楽校」だ。

*

水辺の楽校は、平成8年、建設省（現国土交通省）が全国の一級河川を対象にスタートした子どもたちのための親水プロジェクトである。自然度の高い水辺を、子どもたちの自然体験や学習の場として活用してもらおうという計画だ。平成20年1月現在、全国で249ヶ所、多摩川水系でも準備中を含めて15ヶ所（14市区村）が活発に活動を展開している。（別紙参照）

*

かつて汚染、汚濁にまみれてしまった大都市河川「多摩川」は、浄化とともに“清流の女王”アユが100万匹もさかのぼる川に蘇った。主な要因は下水道の普及、污水处理場の整備など物理的な進捗だが、その基となったのが「昔のようにきれいな多摩川を取り戻そう」という流域市民の環境意識の高まりだ。水辺の楽校では今、こうしたオジさんやオバさんたちが中心となって、川ガキ復活をめざす川遊び体験や環境学習の指導を行っている。

*

川は遊んだ分だけ愛着がわき、学んだ分だけ“ふるさと意識”が高まってくる。いわば自然が育む郷土教育だ。元気な川は子どもたちの歓声でいっぱいだ。流域力で自然を再生し、全国のモデルになるような「多摩川教育河川ネットワーク」をつくりたい。

プロジェクト I

多摩川流域にある「水辺の楽校」等のネットワークづくり

多摩川流域14市区村にある「水辺の楽校」等を緩やかにつなぐ「多摩川教育河川ネットワーク」をつくる。

1. 事業計画

現在、流域には山梨県小菅村、東京都青梅市、福生市、昭島市、八王子市、日野市、立川市、府中市、稲城市、調布市、狛江市、世田谷区、川崎市多摩区、川崎市中原区など、山梨・東京・神奈川の3都県にまたがる14市区村(10市、3区、1村)において、「水辺の楽校」が登録、ないしは準備中にある。

今後、源流域から河口域までを網羅する流域ネットワークづくりをめざす。

2. 事業効果

同じ土俵の上でネットワーク(連絡交流会)ができることにより、広域連携・協働推進が必要な流域一斉水質調査や一斉河川清掃などのテーマについて円滑に検討することができる。

同時に、環境学習や河川愛護、水環境の保全活動などについて、情報交換や協力体制が確立できる。また、流域の小・中学校の上・中・下流、対岸交流が進むことにより、互いの楽校を往き来することが容易になり、源流・上流・中流・下流・河口域の比較学習(総合学習)が可能になる。

このような市民レベル主導の「水辺の楽校」等流域ネットワークづくりは全国初であり、「多摩川・子ども環境シンポジウム」の開催などと併せ、日本の河川文化をリードしてきた多摩川の新たな試みとして、全国に情報発信し、幅広く啓蒙していくことは極めて意義があると考えられる。

プロジェクトⅡ

多摩川・子ども環境シンポジウムの開催

水辺の楽校での交流等を通じて流域の小・中学校に呼びかけ、多摩川・子ども環境シンポジウムを開催する。

1. 事業計画

狛江水辺の楽校では、昨年12月に、第六回目となる「多摩川子どもシンポジウム」を開催した。このうち第四回目・五回目のシンポジウムは、(財)河川環境管理財団の助成を受けて、流域にある水辺の楽校合同で開催した。一年に一回、子どもたちが多摩川の学習成果を、広く流域市民の前で発表する場の提供は、子どもたちにとっても貴重な体験となる。

例えば狛江では、子どもたちによる、子どもたちのための発表・交流の場としてシンポジウムを位置づけ、司会・進行なども子どもたちに委ねている。ちなみに一昨年は、流域から75名(14小・中学校)が参加し、200名を超える市民の前で「大切にしたい多摩川の自然」をテーマに発表した。さらに、発表内容を「みんなの発表誌」にまとめ、発表参加者や流域の学校関係者に無料配布した。

過去六回とも狛江市の小学校を会場にしてきたが、今後は狛江開催にこだわらず、流域の上・中・下流で交代して開催することが望まれる。そのあたりを公平中立の立場から緩やかな合意を目指していくのが、美しい多摩川フォーラムの役目と考えている。

2. 事業内容

流域の水辺の楽校等のネットワークを通して参加者を募集をする。発表は第一部が個人。二部はグループとし、三部では発表者以外の子どもたちも参加できる子どもワークショップを開催。ちなみに第三回シンポジウムでは、「みんなが選ぶ多摩川のシンボルは？」をテーマに、カワセミが選ばれた。今後は「子どもたちがつくる多摩川憲章」などを会場交流の中で話し合い、シンポジウムの成果として公表していくなど、広がりを持たせていきたいと考えている。

プロジェクトⅢ

子ども新聞「多摩っ子」の発刊

「水辺の楽校」等の活動紹介や行事参加を呼びかける
子ども新聞「多摩っ子」を発刊する。

1. 事業計画

平成17年から18年にかけて、(財)河川環境管理財団の助成を活用し、多摩川で活動する水辺の楽校の流域新聞を創刊したが、19年度は助成が得られず発刊できなかった。

今回、子どもの環境教育の立場から新たな視点を加えて、子ども新聞「多摩っ子」を発刊する。これにより、流域すべての「水辺の楽校」等の活動紹介や行事案内などの情報を流域市民に提供する。

2. 事業効果

流域子ども新聞の発刊は、「水辺の楽校」等の間のコミュニケーション・ツールとして極めて有力な手段となる。情報共有することで、スタッフの応援など本格的な協力体制が生まれ、血の通ったネットワークになる。

特に、これから水辺の楽校を立ち上げる活動団体にとっては、貴重な宣伝媒体となり、会員拡充の大きなツールになると考えられる。

以 上

多摩川にある「水辺の楽校」等の流域ネットワーク

